

雜報

●本年一月廿四日の日食結果

(Solar Eclipse of January 24th.)

此の日食は大西洋の北部を横断したのであるが、其の皆既線はアメリカ合衆國のスーパーイオル湖西端に始まつて、ナイアガラ瀑布を過ぎ、コネカト州から洋上に移り、ほるかに英國の北端近くまで達した。観測は主として米國で行はれたが、此の日食線内にはコネル(イサカ市)、ゲドレイ(オルバニー市)、ブサー(ボキプシー市)、エイル(ニウ・ヘーヴン市)、エスレイ(ミドルタウン市)、ナンタケト(ナンタケト市)等の大小公私立天文臺が十ヶ所もあり、又、此の邊は一帶に米國中の人口多く、文化の進んだ地方なので、數ヶ月以前からの前景氣は大したものであつた。

右に記した諸天文臺が居ながら此の日食を觀やうと準備したばかりでなく、他からも例へば、ケルソン山ミラシントン(海軍)とスアースモアミマテソンとブツニア大學との各天文臺はミドルタウンに出張し、ハーグード大學はナンタケトに、又、ヤーキースは三隊を各所に派遣して観測に當らしめた。

「新英州の一月末」さいふ日だから、天氣は多分駄目だらうといふ豫想をした人々が多く、リク天文臺などは、其のために今回は觀測隊を派遣しなかつた。しかるに、實際日食の當日にはナイアガラ以東の土地は一帶に

空が晴れて、観測は充分に行はれ、只、其の以西ミンガン、キスコニン兩州は曇られた。

観測報告によると、其の頃から太陽は新活動を始めんとする時期なので、現はれたコロナも所謂「中位」の程度で、赤道からも、南北の兩黒點帯からもかなり發達したコロナ線が發出し、西縁には殊に珍らしいプロシネンスが見えたといふ。(口繪参照)

自分は此の日食の日、伊太利のナポリ天文臺に居て、部分蝕を觀た。(山本)

●彗星近況 (Comet News)

本年度の第一彗星(1925)は前號に誌した通りシアイン(Schjap)氏が乙女星座に之れを發見して以來西へ運動を繼續し、三月二十八日には獅子座に入り、四月中はシ、ヒ兩星の南五度ばかりの所を動いてゐたが、五月にも尙東行をつづけ、六月始めにはア(レグルス)星の南方に達する見込みである。加州大學天文臺のロイシナー(A. O. Leuschner)氏の計算によれば、此の星は

近日點通過 本年九月十七日

軌道の傾き 百四十六度半

近日點距離 四・一四(天文單位)

であるから、今後も尙暫くは觀られると思ふ。光度は今十一等であるが、距離は頗る遠方であるから、眞の光度は可なり大きいわけである。

本年度の第二彗星(1925b)はリッド(W. R. Ladd)氏が發見以來海蛇座を南西の方へ運動し、五月上旬に星の近くを通過した。五月

末にはベ星の附近に來る筈。此の星についても加州大學の學者たちが、週期十五年弱といふ楕圓軌道を計算したが、之れは正確なものではないといふ。光度は八等。

次に、本年の第三彗星(1925c)はオルキス(Olrig)氏がペガソス座に發見以來、北行し速度も増加した。四月中旬にはエー星を訪ひ二十四日にはアンドロメダ座に入つてオ星の近くを經五月五日には遂にカシオペア座に入つた。光りは八等級であるから三吋望遠鏡で充分に見える。五月末には北極星の東に來るだらう。

●ヘール氏新設の太陽研究所

(Prof. Hale's Solar Laboratory)

ヘール(G. E. Hale)氏々々へばヤーキース天文臺とケルソン山天文臺を創立した學界の大功勞者であるが、數年前、病氣のためケルソン山天文臺長を辭した。其の後、エザブトに轉地して、暫くは天文の事を忘れてゐたらしく見えたが、一九二三年末から又元のパスアデマ市に歸來し、こんど新しく私立の太陽研究所を建て、之れも新案の分光太陽鏡(Spectralheliograph)を用ゐて、太陽表面の觀察及研究をやるさいふ。此の研究所はケルソン山麓のパスアデマ市に建てられるのであるが最近氏の研究によれば、ケルソン山の上は時々急激な氣流によつて、天體觀測が妨げられるに反し、平地にあるパスアデマ市では此の種の妨害が少なく、設備さへあればケルソン山よりも立派な觀測が出来る筈である。此

の新研究所には十二時(三十センチ)のレンズを持つ望遠鏡を置くことになり、目下、キルソンの天文臺のバサテナ工場で製作中である。

●ミラ星の直徑(Diameter of Mira)

キルソン天文臺の百吋(二五八センチ)反射望遠鏡で、ピース(Peise)氏がミラ星かの有名な變光星)の視直徑を干涉法で測つたところ、(天界第一巻六〇頁参照)其の結果、〇・〇六秒の角度となつた。之れを實直徑に直して見ると、さきに同一方法で測られたアンタレス星の直徑よりも少しく小さいけれど、それでも地球の軌道よりもはるかに大きいものとなる又、〇・〇六秒といふ角度は干涉法で測られた恒星直徑の最大のレコードである。

●天文時の廢止について

(On Astronomical Time)

國際協議に基づき、今一九二五年の始めからは天文時といふものを廢し、天文學者はすべて一般社會の常用時を用ふるやうになつた。天文時は毎日の日附が正午に始まり、次の日の正午までを一日として二十四時間に區分する方法(午前午後の別を用ゐず、〇時より二十四時と呼ぶ)であつて、古くはトレミーの時代から千八百余年の間、天文家を用ゐられてゐたものであるが、天文學と社會との接觸が多くなつたため、今回斷然之れを廢止したわけである。しかし、天文家の中には申々此の昔しからの天文時なるものを便利だとして棄て難く思ふ人が多く、いよゝ今

年になつてからもやはり之れを用ゐてゐる人があるらしい。ついでに今年七月に英國ケンブリヂ市で開かれる天文同盟總會の席上でも此の問題に關して激しい討論があるらしい前景氣であつて、オランダ其の他から種々の保守的な議案が出るらしい。

●平山清次教授(Prof. K. Hirayama)

本誌前號に、日本からケンブリヂの天文同盟總會に代員として出席される一人を平山信氏と記したのは誤りであつて、實は平山清次教授である。教授は五月十四日神戸出帆の伏見丸で渡歐された。

●本年度の京都大學天文講義

本年四月から京都帝國大學理學部宇宙物理學教室で行はれてゐる天文學の諸講義と其の擔當者は左の通り。

新城教授

宇宙物理學

宇宙物理學研究實驗及演習

天文學史

地磁氣及空中電氣論

山本教授

星學道論

天體物理學

天體觀測第二部

上田助教授

誤差論及計算法

球面天文學

天體觀測第一部

荒木助教授

天體力學

宇宙物理學實驗及演習

小野講師は昨年來病氣で目下休んで居られる。

●ジーンズ氏(Dr. J. H. Jeans)

英國に於いて目下盛名隆々たるジーンズ博士は、去る二月、ローヤル天文學會總會に於いて今明二ヶ年間の會長に推舉せられた。又、最もなく同氏は英國に於ける樞密院の物理學研究委員顧問に任ぜられた。

●ロシア國の天文學界(Astronomy in Russia)

ロシアと日本とは近く國交を回復したわけだから、其の天文學界の事情も一應知る必要がある。小遊星の發見等で以前から有名なシメイス(Simeis)クリミア半島南端(四十吋)反射望遠鏡を買つたことは前に報じた。天界第三十二號第二六七頁)之れと前後して、ロシア政府は號學研究の獎勵に思ひきつた大方針を立て、モスコフには大學天文臺と相並んで國立的天體物理天文臺の素晴らしいのを新設し、又、レニングレード(元のペトログラード)には大きな天文協會を起し、有名なブルコフ天文臺を充實し、其の出張所としてニコラエフやオデッサの觀測所にも力を注ぎ、更に遙か中央アジアのタケセント天文臺も今後はブルコフの一支所として活躍するといふ次第。其の他、國內に散在する十數ヶ所の大學天文臺も此の氣運に乗じて奮起するに必然である。今後は世界に於ける天文國として米と獨と露とが最も重要なものに數へられるだらう。